

あづまのくに（東国）考

熊倉浩靖

今年度から群馬学センターとして公開授業を持つこととなった。そこで、群馬県公式サイト内の「観光・県の紹介」でも強調されている「古代東国」に関する基礎的な考察を示して内外の理解を得る一步としたい。

第一節 東国とは

「あづまのくに」の漢字表現

東国は「とうごく」と読まれる場合が多いが、六国史（『日本書紀』に始まる政府編纂の歴史書）写本に見られる五十ほどの東国ないし類似用例にはほぼ全て「アツマノクニ」と振り仮名がふられてきた（読みは「あづまのくに」）。西国用例が三例ほどしかなく全て「ニシノクニ」と仮名が振られていることを考えれば、東国は単なる東の国ではなく「あづまのくに」という特定の地域に当てられた漢字表現と見なければならず、「あづまのくに」としての立論が不可欠である。拙論を「あづまのくに（東国）考」とした所以もここにある。なお、「あづまのくに」の漢字表現としては「我姫国」（『常陸国風土記』）、「吾孀国」（『日本書紀』景行天皇四十年是歳条）などもある。

「あづま」の地は、壬申の乱時の「東国」用例や『万葉集』東歌収録範囲からは不破・鈴鹿両関の東、信濃・遠江以東の広域に及ぶが、『常陸国風土記』の「古は相模の国足柄の岳坂より東の諸の県は惣べて我姫の国と称ひき。この当時、常陸と言はず。難波長柄豊碕大宮に臨軒しめしし天皇のみ世（孝徳朝）に至り、我姫の道、分れて

八の国と為り、常陸の国、その一つに居れり」や『日本書紀』景行天皇四十年是歳条の「日本武尊、弟橘媛をしのびたまふ。情あり。故に碓日嶺に登りて東南を望りて三たび歎きて曰く。吾孀はや（孀。これを免摩といふ）。故、山東諸国を号けて吾孀国と曰ふ也」の記載に従えば、概ね今日の関東地方と重なりと見られ、本来、この領域での議論が必要であろう。

天（あめ）と夷（ひな）の間のある一定・独自の地域

とくに重要な記載が『古事記』雄略天皇段に見られる。槻（ニケヤキ）の木の下で豊楽の宴を催した際、蓋に槻の葉が浮かんだ事に激怒した大王が、蓋を捧げた姪を手打ちにしようとした時、姪が「吾が身をな殺したまひそ、白すべき事あり」と歌う（万葉仮名表記を書き下し）。

纏向の日代の宮は 朝日の日照る宮 夕日の日駆ける宮 竹の根の根垂る宮 木の根の根蔓ふ宮 八百丹よし い杵築の宮 真木の栄く檜の御門 新嘗屋に生ひ立てる百足る槻が根は 上枝は天（原文は「阿米」、以下同）を覆へり 中枝は東（「阿豆麻」）を覆へり 下枝は夷（「比那」）を覆へり 上枝の枝の末葉は中枝に落ち触らばへ 中枝の枝の末葉は下枝に落ち触らばへ 下枝の枝の末葉は あり衣の三重の子が捧がせる瑞玉蓋に浮きし脂 落ちなづさひ 水こをろこをろに 是しも あやに恐し高光る日の御子 事の語言も 是をば

天語歌と称されるこの歌謡には多様な課題が孕まれているが、東に

注目すれば、古代の貴族・官人層が倭国の地域構造を天・東・夷の三層構造で捉えていたことに気づく。天は、『隋書』が倭王は「姓は阿每、字は多利思北孤、号は阿輩雞彌」と記し、七世紀代の大正諡号が「天」で始まるように、大王の第一義的国土を示し、夷が化外の地であるのに対し、東を、両者の間にある一定・独自の地域と捉えていたということである。

あづまが一定・独自の地域だという意識は、八国に分けられたとする孝徳朝（六四五～六五四）以降も持続しており、『日本書紀』天武天皇四年（六七五）正月壬戌条は「大倭国瑞鷄を貢ぎ、東国白鷹を貢ぎ、近江国白鷄を貢ぐ」と、あづまを大倭・近江に對置される一つの国と記載している。さらに下って『統日本紀』天平宝字七年（七六三）正月庚申条は「唐の吐羅、林邑、東国、隼人らの樂を作す」と記して、吐羅樂・林邑樂などと並び称せられる「異国」の樂が東国の名を帯びていたことを示している。

あづまの中心は上毛野国

その中心が群馬県地域と重なる上野国であることは、『万葉集』編者が国名を確定した東歌九十首のうち二十五首が上野国と、上野国が圧倒的であることから推測されるが、『日本書紀』景行天皇五十五年条の伝承的記載「彦狭嶋王を以て東山道十五国都督に拝けたまふ」・東国の百姓、その王の至らざるを悲しみて竊に王の戸を盗みて上野国に葬る」は、より直截的にあづまの中心を上野国と指摘している。

一方、上野国は「かみつけ」「こうづけ」と読まれるが、県外の人には読めない場合が多い。それもそのはずで、六九〇年代の藤原宮出土木簡「上毛野國車評」に見られるように、元々は「上毛野」と書かれ「かみつけの」と読まれていた表現を、八世紀初頭に地名を漢字二文字で表現することが求められた時、文字表現としては「毛」を外し、やがて読みとしては「の」を外すという行き違いが生じたためである。「群馬」も元の表現は「車」で、江戸時代までは「くるま」の読みが

主流である。

第二節 あづまの成り立ち

魏の年号が刻まれた三角縁神獸鏡とともに

あづまの成り立ちが何時かは私の研究目標の一つでもあるが、関東地方の弥生時代は、西日本に比べると豊かではなかった。

群馬県地域を中心として俄かに活況を呈してくるのは古墳時代に上ってからである。

一つの象徴が柴崎蟹沢古墳（高崎市）出土の中国・魏王朝の正始元年（二四〇）の銘が刻まれた三角縁神獸鏡である。三角縁神獸鏡は邪馬台国の女王卑弥呼に関わる鏡として論争的だが、四〇〇面を超えて見つかった三角縁神獸鏡のうち魏の年号が確認できるものは僅か五面に過ぎない。他の四面のうち三面は蟹沢古墳出土鏡と同じ鋳型の鏡で兵庫豊岡市の森尾古墳、山口県周南市の竹島御家老屋敷古墳、奈良県桜井市の外山茶臼山古墳から出土しており、残り一面は島根県雲南市の神原神社古墳出土の景初三年（二三九）銘鏡だが、蟹沢古墳出土以外は全て西日本である。三角縁神獸鏡自体が関東・東北では少なく、群馬県出土が過半を占めるが、全体でも二十面に達せず、その中で蟹沢古墳出土鏡の突出性は注目される。蟹沢古墳は三世紀代には遡らないが、あづまの古墳時代が魏の年号を記す三角縁神獸鏡と共に始まることは意識しておきたい。

だが、この時点で「あづま」が成り立っていたとは言い難い。例えば、群馬の古墳時代は、元島名將軍塚古墳（高崎市）や前橋八幡山古墳のような前方後方墳から始まり、直ちに築造の中心が前方後円墳に入れ替わり、四世紀後半以降、県内各地で大型前方後円墳が陸続と造られるが、下毛野国と重なる栃木県地域は、五世紀半ばまで前方後方墳が主流であり、異なる地域社会に属していた可能性が高い。まして関東全域が一定・独自の地域としてまとまっていたかは疑問が多い。

表1 墳丘長200m以上で長持型石棺が出土・確認、伝承されている古墳一覧
(築造年代は推定、墳丘長については説がある)

	古墳名	確認・伝承	墳丘長	築造年代	所在地	備考
1	大仙	確認	486m	5世紀前・中	大阪府堺市	伝・仁徳陵
2	五社神	伝承	275m	4世紀後・5世紀初	奈良県奈良市	伝・神功陵
3	室宮山	確認	238m	5世紀前半	奈良県御所市	
4	宝来山	伝承	227m	5世紀前半	奈良県奈良市	伝・垂仁陵
5	古市墓山	確認	225m	5世紀前半	大阪府羽曳野市	伝・応神陵陪塚
6	佐紀石塚山	伝承	218m	4世紀後・5世紀前	奈良県奈良市	
7	西陵	確認	210m	5世紀半ば	大阪府泉南郡岬町	伝・成務陵
8	太田天神山	確認	210m	5世紀中・後	群馬県太田市	
9	津堂城山	確認	208m	4世紀後・末	大阪府藤井寺市	陵墓参考地

宋の軍号を受けた可能性が高い太田天神山古墳の主

そうした状況下だが、県内各地で大型前方後円墳を造り続けた群馬地域の突出性は否めず、とくに、五世紀半ばと考えられている太田天神山古墳は墳丘長二一〇メートルで、全国古墳ベスト三〇に入る威容を示している。加えて、王者の石棺と呼ばれる「長持型石棺」に葬られていた（墳丘長一二五メートルの伊勢崎市・お富士山古墳も長持型石棺）。墳丘長二〇〇メートル以上で長持型石棺が確認・伝承されている古墳は十指に満たず、奈良・大阪を除けば、太田天神山古墳しか見当たらない（表1）。

この突出性を倭国の中で位置づけようとするなら、倭の五王と称される五世紀代の倭国王が中国・宋王朝に

度々使いを遣わし、自らだけでなく、王族ないし有力な臣下・同盟者にも叙爵を求めていたことが注目される。『宋書』夷蛮伝倭国条には次のようにある。

太祖の元嘉二年（四二五）、讃、また、司馬（＝倭王の軍監察官）の曹達を遣わし、表を奉りて方物を献ず。讃死して弟・珍立つ。（珍）使を遣わし、貢を献じ、使持節・都督・倭・百濟・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事・安東大將軍・倭国王を称して、表して除正を求む。詔して安東將軍・倭国王に除す。珍、また、倭隋ら十三人に平西・征虜・冠軍・輔国將軍の号を除正せんことを求む。詔して並べて聴す。

二十年（四四三）、倭国王済、使を遣わし奉献す。また以て安東將軍・倭国王となす。

二十八年（四五二）、（済に）使持節・都督・倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事を加え、安東將軍は故の如し。あわせて上る所の二十三人に軍郡を除す。

傍線を附した部分が王族等への叙爵の内実だが、その地位を倭国王と比べてみると、倭国王自身が求めた安東大將軍は第二品で一格上だが、叙爵された安東將軍と、王族等に求めた平西・征虜・冠軍・輔国將軍は共に第三品ではほぼ同格である。五世紀半ばの築造と推定され、墳丘長二一〇メートル、長持型石棺に葬られた太田天神山古墳の主は、珍が求めた十三人ないし済が求めた二十三人の中に含まれるのではなからうか。憶測を逞しくすれば、「軍郡」の表現は地域支配を兼ねた軍政官の可能性を想起させ、平西・征虜・冠軍・輔国將軍の中では、あづまの地が蝦夷地に面したフロンティアであることから征虜將軍の可能性が高いと見られる。

第三節 あづまを成り立たせた人々の伝承と実像

核となった人々の始祖伝承のあらましと構造

このように、古墳時代群馬の主人公は、地方の単なる有力者ではなく、王権・政治体の中枢と深く関わっていた可能性が高いが、『日本書紀』などは、その人々の中核を上毛野君と記して多くの始祖伝承を載せている。その人々と太田天神山古墳の主とが直結できるかは不明だが、上毛野君にまつわる始祖伝承のあらましをまとめると、「御肇国天皇」つまり始祖王の伝承を持つ崇神天皇（御間城入彦瓊殖天皇）の長子（豊城入彦命）を始祖と仰ぎ（豊城命をもて東を治めしむ。是、上毛野君・下毛野君の始祖なり）、孫の世代あたりから東国に派遣されて定着・展開したという伝承が中心となっているが（彦狭嶋王を以て東山道十五国都督に拜けたまふ。是、豊城命の孫なり。御諸別王に詔して曰く、汝の父彦狭嶋王、任所に向かふことをえずして早く薨ぬ。故、汝専め東国を領めよ。その子孫、今東国に有り）、一方で、韓半島諸国・諸地域に派遣されたという伝承を度々記し、また、上毛野君の祖先の血を引くと称して倭国に再渡来して倭国の貴族・官人となり、文書や馬の扱い、経済・土木に関わることとなったという氏族もあまた存在し公認されていた。

知られているように、古代社会は厳格な身分制社会である。文字通り氏素性や姓と称される身分秩序が重視される。概観すれば、古代国家の構造では、公卿と呼ばれる一握りの上級貴族の政治判断のもとに、国政を取り仕切る閣僚級の中級貴族、実務官僚として働く下級貴族、有姓・無姓の無数の人間が位置づく。その中で、上毛野君（朝臣）の同族とされる人々は、始祖王の血を引くと認められる一方で、あづまの地に大きな基盤を持った中級貴族として朝堂に重きをなした東国六腹朝臣（上毛野朝臣・下毛野朝臣・大野朝臣・車持朝臣・佐味朝臣・池田朝臣）を核に、一部に韓半島諸国・諸地域からの渡来系集団を含

む、かなり複雑な構造を持っていたということである。実際『新撰姓氏録』は三十八箇所三十四もの氏族が上毛野君と始祖を同じくするとしている¹³。しかし複雑な構造は、この氏族群が古代国家形成に大きく寄与したことをも示唆する。

古代国家の礎を築いた氏族群

現に『日本書紀』や『続日本紀』の記載によれば、日本古代国家は、中華文明を手本として律令による法治と修史を基礎に、唐を隣国、新羅・渤海を日本の下位に位置する蕃国と位置づけ、蝦夷・隼人等を服すべき化外の民とした国家戦略を進めたが、その所要所に上毛野君同祖氏族群は大きな役割を果たしたことが伺われる。

例えば、上毛野君 稚子（天智天皇二年（六六三）百濟救援の戦い・白村江戦役）に大軍を率いる前將軍となつて渡海・参戦し、上毛野君三千は天武天皇十年（六八二）「帝紀」及び上古の諸事を記し定める「役職の諸臣首座に、壬申功臣でもあつた佐味君宿那麻呂は持統天皇三年（六八九）撰善言司という役職の諸臣首座に着いている¹⁶。

国家の要とも言える大宝律令選定（七〇一年完成）における下毛野朝臣古麻呂の役割も大きく、彼は、その功績で大宝二年（七〇二）参議に任じられ、和銅二年（七〇九）の卒時は式部卿大將軍であつた。

蝦夷政策に関して言えば、和銅元年（七〇八）陸奥守に就任した上毛野朝臣小足が翌年四月に没すると、七月には上毛野朝臣安麻呂が陸奥守となり、ついで上毛野朝臣広人が陸奥按察使となる。広人が養老四年（七二〇）蝦夷の攻撃の前に敗死するや下毛野朝臣石代が副將軍として陸奥に向かった。続いて登場するのが大野朝臣 東人¹⁷で、多賀城碑によれば多賀城は神龜元年（七二四）東人の「所置」とあり、東人は天平十二年（七四〇）末まで陸奥按察使兼鎮守府將軍の地位にあつた。

なお、車持君国子の娘・与志古娘が藤原朝臣鎌足の妻として藤原朝臣不比等らを生んでいることも注目される。

文書の扱い・対外交渉への深い関与

上毛野君の祖先伝承の中で、とくに注目しておきたいのは『日本書紀』応神天皇十五・十六年条に載せられた博士王仁招聘伝承である。

王仁を百済から招くことで我が国に本格的に漢字・漢文が導入・定着させられたと伝わるが、招聘の使いとされたのは上毛野君の祖、荒田別・巫別であつたと『日本書紀』は記す。この伝承は奈良・平安時代の貴族・官人層の間では著名な伝承で、『続日本紀』延暦九年（七九〇）七月辛巳条の津連真道らの上表文や延暦十年（七九一）四月乙未条の文忌寸最弟らの上表文に代表されるように、文書の扱い等に関わる幾つかの渡来系氏族は上毛野君の祖・荒田別らにより倭国に招聘された主張、公認されていた。

文書の扱い・対外交渉に深く関与していたことは、韓半島からの渡来集団でありながら後に上毛野君（朝臣）の姓を得、上毛野氏関係氏族の中心となる田辺史の伝承にも伺われる。関係伝承を引用しておきたい。

『日本書紀弘仁私記』（弘仁十年＝八一九成書）記載の「諸蕃雑姓記注」

田辺史・上毛野公・池原朝臣・住吉朝臣らの祖、思須美・和徳の兩人、大鷲鷯天皇（＝仁徳天皇）御宇の年、百済国より化来す。しかして言ふに、おのれらの祖、これ、貴国（＝日本）將軍上野公竹合なりてえり。天皇、矜憐して彼の族（＝上毛野君同祖氏族）に混ぶ。しかして、この書に諸蕃人（＝渡来系氏族）といふなり。

『新撰姓氏録』左京皇別下 上毛野朝臣条

下毛野朝臣同祖。豊城入彦命五世孫多奇波世君の後なり。大泊瀬幼武天皇（諡、雄略）の御世、努賀君の男、百尊、阿女の子のために婿の家に向かふ。夜を犯して帰る。応神天皇の御陵の辺において騎馬の人と逢ひ相互に話し語らふ。馬を換へて別る。明日、換へし馬を見るに、これ土馬なり。よきて、姓、陵辺君を負ふ。百尊の男、徳尊の孫、斯羅、諡、皇極の御世、河内の山下田

を賜ふ。文書を解するをもて田辺史となす。宝字称徳皇帝、天平

勝宝二年（七五〇）改めて上毛野公を賜ふ。今上弘仁元年（八一

〇）、改めて朝臣の姓を賜ふ。続日本紀合。

史実としても、百済が滅亡した後の百済救援軍、白村江の戦いの軍団を率いた倭国の前將軍は上毛野君稚子であつたことは前述したが、『日本書紀』舒明天皇九年（六三〇）是歳条は、蝦夷の戦いに敗れて磐に逃げ帰り怖気づいていた上毛野君形名に対して、彼の妻は、「汝が祖達、蒼海を渡り、万里を跨びて、水表の政を平けて威武をもて後葉に伝へたり。今、汝、頼に先祖が名を屈かば、必ず後世の為に嗤はれなむ」と叱咤激励したと記す。「かかあ天下」の原像とも言えるこの話を史実と断定するにはなお躊躇せざるをえないが、氏族の危急存亡の際に、こうした言葉が語られたと記される中にも、上毛野君の始祖達が韓半島諸国・諸地域との交渉に深く関与した様子が伺える。

眩い金属容器が結ぶ百済・北齊への道

こうした史実や伝承を裏付けるように、群馬県地域からは、類例の少ない眩い金属容器を中心に、韓半島諸国・諸地域や中国諸王朝との関係を考えなければ理解しにくい優品がまた出土している。

例えば八幡観音塚古墳（高崎市）出土の金銅製托杯（承台付蓋碗）は、銅托銀杯で透かし彫りのある優品が百済・武寧王（寧東大將軍百濟斯麻王）陵の王妃棺内から発見されているが、国内では同古墳から二点出土している以外では、托を伴う杯は千葉県木更津市の金鈴塚古墳と福岡県福津市の宮地嶽古墳から見つかっているだけで、托を伴わない例も埼玉県行田市の將軍山古墳と小見真観寺古墳、神奈川県伊勢原市の登尾山古墳、長崎県対馬市の保床山古墳からの四点しか知られていない。計八点のうち、あづま六点の集中度は高い（図1）。

百済・武寧王陵は奇跡的に発見された未盗掘墳で、発見された買地券（墓誌石）から墓の主と没年・埋葬年が判明した韓国唯一の古代王墓である（武寧王 五二三年没・五二五年埋葬。王妃 五二六年没・

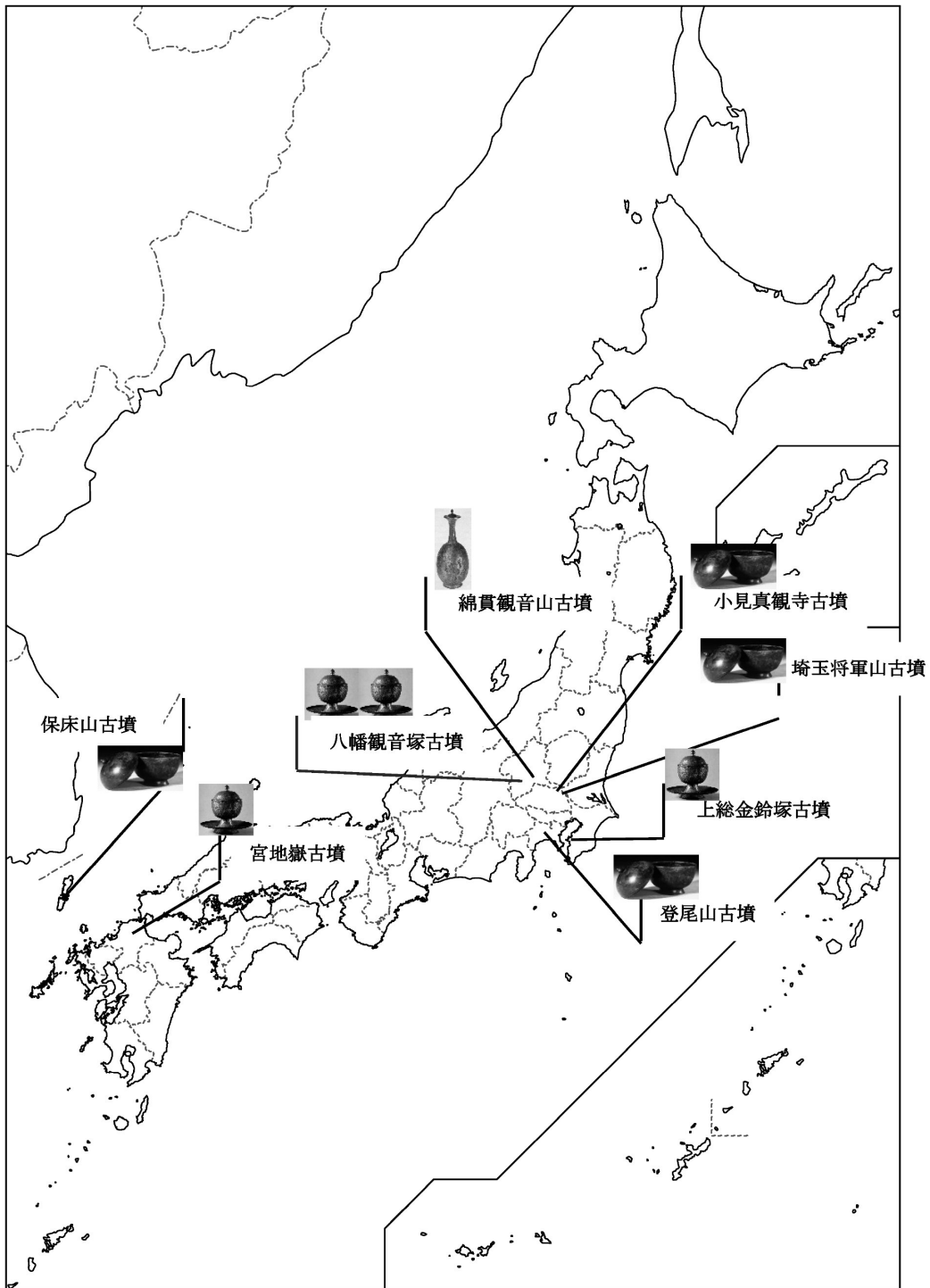


図1 (金) 銅製托杯と瓶の分布

武寧王陵獣帯鏡



1

高崎市綿貫観音山古墳獣帯鏡



2

武寧王陵銅托銀杯托蓋



3

高崎市八幡観音塚古墳銅承台付蓋鏡



4



武寧王陵銅鉢



5

高崎市八幡観音塚古墳銅鉢



6

武寧王陵飾履



7

高崎市下芝谷ツ古墳飾履（復元品）



8

写真1 八幡観音塚古墳・綿貫観音山古墳・下芝谷ツ古墳出土品と百済・武寧王陵出土品
 (写真提供：1. 3. 5. 7. 韓国公立公州博物館 2. 群馬県立歴史博物館 国(文化庁)保管 4. 6. 8. 高崎市教育委員会)

五二九年葬)。その出土品と群馬の古墳出土品が類似していることの意味は大きい(写真1)。

加えて述べれば、武寧王陵の王頭部に置かれて最も重視されたと見られる獣帯鏡と同形の鏡が綿貫観音山古墳(高崎市)から出土しており、関係の深さを後押しする。また、王・王妃ともに履いていた飾履と類似し、我が国出土品としては古層となる金銅製飾履が下芝谷ツ古墳(高崎市)から出土している。

さらに、綿貫観音山古墳は、六世紀代の中国・北斉王朝の貴族墓から集中的に出土している銅瓶が国内で唯一見つかった古墳としても知られる(写真2)。

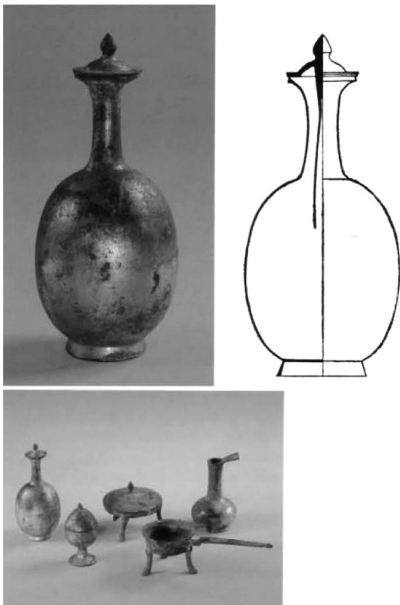
北斉は、北魏が東西に分裂した後の東魏を受け継いで五四九年に成立し、五七七年、西魏を受け継いだ北周に滅ぼされた短命王朝だが、根津美術館蔵の一連の石仏などに垣間見られるように、芸術的な表現に富んだ王朝で、葬制においては華北の皇帝・貴族墓に伝統的な厚葬傾向が強かった。

(鍍金)銅瓶の副葬もその一環と見られ、少なくとも北魏代四点・北斉代七点が確認されている(表2)。玉子形ないし蕪形の胴と長い頸、ピンセット状の金属片でしつかりとはめ込まれる蓋を持つ。

同時副葬の(金)銅製品には煉丹具と見られるものが多いので、銅瓶も煉丹具として副葬された可能性があるが、銅瓶は、七世紀以降は主として仏具とされ、呼び方も淨瓶(軍持)となり、寺院伝世品が多くなる。我が国も同じ流れにあり、観音山古墳出土瓶以外は全て法隆寺伝世品(東京国立博物館法隆寺献納宝物)である。計十一品のうち三点は施文から固有名称がつけられているが、玉子形と蕪形が半々の八点は、錫を含む銅合金、いわゆる佐波理²⁵響銅²⁶鑄造挽物仕上げて、綿貫観音山古墳出土瓶も北斉瓶の代表格である庫狄迴洛墓出土瓶も佐波理である。

四半世紀も前に、私は、矢部良明氏の先行研究²⁵によりながら、銅瓶が観音山古墳にもたらされた可能性を検討したことがあるが、なお、

北斉貴族の銅瓶：中国への拡がり
北斉・庫狄迴洛墓出土銅瓶 (18.2cm)



綿貫観音山古墳出土銅瓶 (31.3cm)

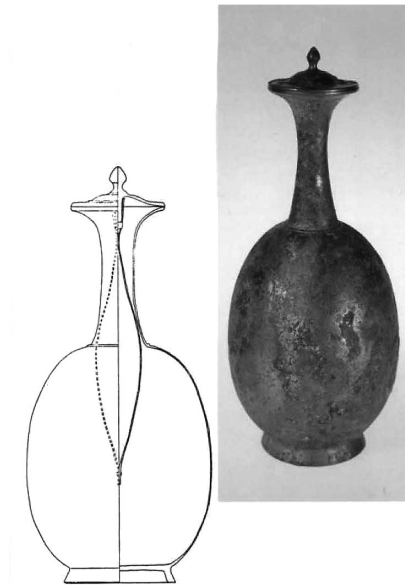


写真2 綿貫観音山古墳出土銅瓶と北斉・庫狄迴洛墓出土鍍金銅瓶
(高崎市教育委員会編『東アジアと古代東国』1989より転載)

表2 中国における銅製瓶出土状況（矢部良明氏の原表に基づき作表）

遺跡名（所在地）	紀年	銅瓶の数量・器形及び表現	他の主な出土銅器	他の主な出土遺物	発掘年
北魏冀州刺史封磨奴墓 （河北省景县安陵区前村郷）	北魏太和七年（四八三）没 正光二年（五二一）葬	①玉子形の胴を持つ玉子形瓶 ②無形の胴を持つ玉子形瓶	托杯2、鏡、燭炬、鏝斗、盤、座器	ガラス碗1、青磁碗1	一九四八
北魏營州刺史韓賄夫人高氏墓 （河北省曲陽県党城公社嘉峪村）	北魏正光五年（五二四）	①頸部細長、瓶体楕円形、円足、高一四・五cm ②腹部較短、円腹一口	鏝斗、灯、鏡、碟	金釵、陶碗10、陶盒、陶甗等17、墓誌	一九六四
北齊大尉公庫狄迴洛・同夫人合葬墓 （山西省寿陽県賈家莊）	北齊太寧二年（五六二）没 河清元年（五六二）合葬	①塗金銅瓶、細頸、卵形腹、円底圈足、高一八・二cm、蓋裡銜接二鉄片挿入瓶内 ②管状口帯一長流、長頸、鼓腹、円底、高一四・三cm ③瓶細頸、深腹、座蓋形、残高一五・五cm	塗金唾壺2、三足器、碟、斗、高足杯、鏡、盒、蓮華燭台、龍頭	灰釉甗等121、陶磁器39	一九七三
東魏殷州刺史李希宗・同夫人合葬墓 （河北省贊皇県南郭村）	東魏興和二年（五四〇）没 北齊武平六年（五七五）夫人合葬	①金銅盤口長頸瓶	金銅鏝斗、銅盤	銀盤、陶甗等106、陶磁器34、墓誌	一九七六 （盗掘あり）
北齊神武皇帝十四子 高潤墓 （河北省磁県東槐樹村）	北齊武平六年（五七五）没 武平七年（五七六）葬	①塗金、細長頸、鼓腹、圈足 高一五・四cm	円盒	陶甗等280、墓誌、陶磁器27、石製品7	一九七五 （盗掘あり）
北齊祀部尚書崔昂・同夫人合葬墓 （河北省平山県上三汲村）	北齊天統二年（五六六）没 隋開皇八年（五八八）夫人仲氏没	①銅細長頸瓶（玉子形瓶） ②銅盤口瓶	鏡5、杯2、壺2、鏝斗、三足器2、四足器、罐、熨斗、盃、虎子、盤、鏡、灯	陶甗等10、墓誌、陶磁器14	一九七一

明確な解答に至っていない。研究の至らなさを恥じるばかりだが、綿貫観音山古墳の主代表されるあづまの王者たちが持っていた広がり極めて広がったことだけは、改めて強調しておきたい。

発掘調査された唯一の正八角墳の存在

七世紀代の古墳としては、規模そのものは小さいが、吉岡町の三津屋古墳などが注目される。発掘調査された唯一の正八角形の古墳だからである（写真3）。現在、八角形の可能性のある古墳は十基ほどが知ら

れているが、半数が、七世紀半ばから八世紀初頭の大王（天皇）陵ないし、それに準ずる皇太子墓とされている（表3）。その中で、確実な正八角形墳は、今のところ三津屋古墳だけである。

三津屋古墳が大王（天皇）陵に直結する可能性は低いが、「八紘一字」の考え方（『古事記』序文は、天武天皇の即位に際して「乾符を握りて六合を摠べたまひ、天統を得て八荒を包ねたまひき」（原漢文）と記し、『日本書紀』神武天皇即位前紀は、神武天皇の即位の伝承に際して「六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて宇に為むこと」（原漢文）

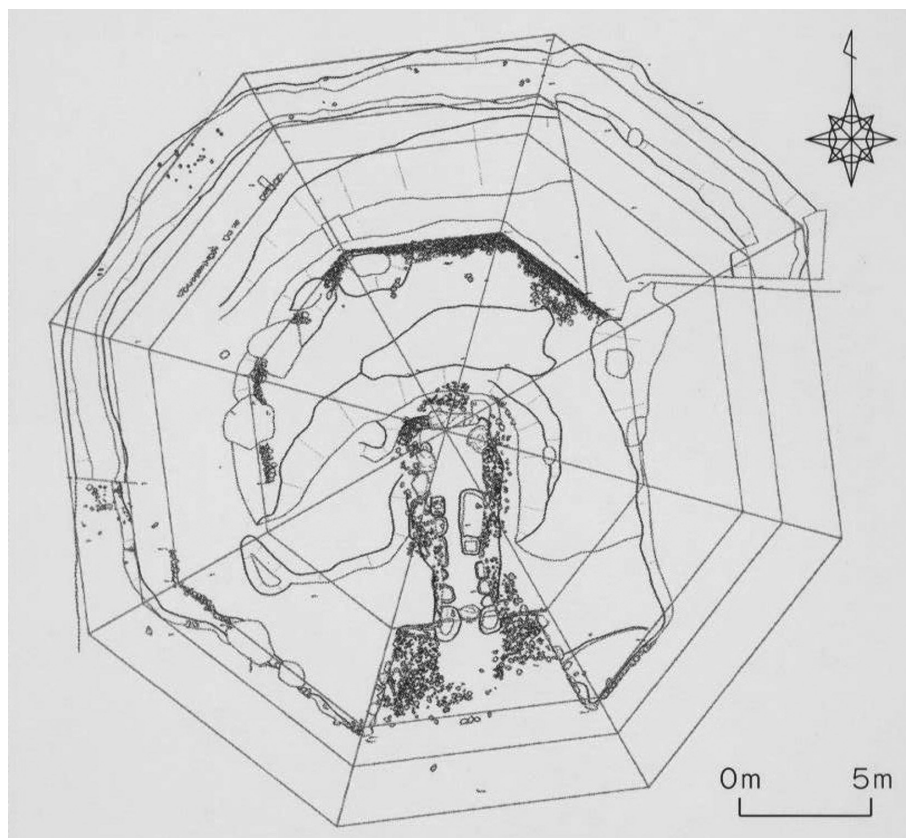


写真3 三津屋古墳の復元実景と調査時の実測・復元図（写真提供：吉岡町教育委員会）

表3 八角形墳一覧

	古墳名	対辺間	構築年代	所在地	特 質	陵墓指定
1	稲荷塚	20m	7世紀前半	東京都多摩市	開口位置は稜角武、墳形・年代に不確定要素大	
2	神保一本杉	18m	7世紀前半	群馬県高崎市	上段円形・下段長八角形、年代に議論あり	
3	経塚	12m	7世紀前半	山梨県笛吹市	二段築成、正八角形ではない	
4	中山荘園	13m	7世紀第Ⅱ四半期	兵庫県宝塚市	外護列石八角形、方形土壇付、墳形に議論あり	
5	段ノ塚	42m	7世紀第Ⅱ四半期	奈良県桜井市	上八角下方墳	現・舒明天皇陵
6	三津屋	22m	7世紀第Ⅲ四半期	群馬県吉岡町	二段築成、墳丘部・周堀も正八角形確認、石室真北	
7	牽牛子塚	30m	7世紀第Ⅲ四半期	奈良県明日香村	三段版築築成の八角墳	推定・斉明天皇陵
8	御廟野	42m	7世紀第Ⅲ四半期	京都府京都市	二段の方形壇上に截頭八角墳	現・天智天皇陵
9	野口王墓	39m	7世紀第Ⅳ四半期	奈良県明日香村	上八角下方墳	現・天武持統合葬陵
10	束明神	30m	7世紀末	奈良県高取町	横口式石槨、唐尺使用	推定・草壁皇子墓
11	尾市1号	11m	7世紀第Ⅳ四半期	広島県新市町	墳丘裾に列石、前面直線・後背面曲線、墳形に議論あり	
12	中尾山	30m	8世紀第Ⅰ四半期	奈良県明日香村	三段八角、横口式石槨、火葬墓	推定・文武天皇陵

と記している）や『古事記』の「多迦比迦流 比能美古 夜須美斯志 和賀意富岐美（高光る 日の御子 八隅し） 我が大君」という表現（景行天皇段所載の倭建命への美夜受比売の歌）、あるいは天皇即位の高御座が八角形で、天武朝の建物と推定されている前期難波宮跡から「八角殿院」と呼ばれる八角形礎石が発掘されていることなどから、八角形墳築造の思想的根拠を考える上で三津屋古墳の存在意義は大きいと見られる。

伊香保（厳穂）嶺大噴火を克服

このように、あづまが成り立っていたと見られる五世紀半ばから七世紀半ばにかけて、あづまは、群馬県地域を中心に、一貫して我が国古墳時代を代表するような墳墓と文物を見せているが、二〇一二年発見の金井東裏遺跡などに見られるように、真つ只中の西暦五〇〇年前後から半世紀の間に度重なる榛名山大噴火の大惨事に見舞われている。

金井東裏遺跡は甲冑をまとった人物が火砕流に埋められたままの形で発見されたことで一躍注目を浴びたが、西暦五〇〇年前後の火砕流に見舞われた遺跡としては渋川市の中筋遺跡なども著名で、遺跡に立つと、噴火の凄まじさがひしひしと伝わってくる。その後は大量の火山灰や軽石が地域を襲い、六世紀半ばの黒井峯遺跡（渋川市）などは、短時間のうちに軽石に埋没したため当時の集落の様子が手にとるように分かると言われる。地域によっては、火山灰や軽石の堆積は二メートルを超え、豪族居館として高い評価を受けている三ツ寺Ⅰ遺跡・北谷遺跡（高崎市）なども、その下に完全に埋められていた。

その恐ろしい体験・記憶から、榛名を、抜きん出て恐ろしい存在を意味する厳十穂^{いひふ}伊香保と呼ぶようになったと北川和秀先生は指摘される。伊香保の歌は八首に及び、地名が読みこまれた歌としては最も多く、『万葉集』編者が国名を確定した東歌九十首の一割近い。恐ろしいと共に近しい山となつたのであろう。

では、なぜ後世、この山は榛名とよばれるようになったのか。私は、榛名山南麓に早くから展開・活躍していた渡来系集団が噴火に直面した際、韓国ほぼ唯一の火山である漢拏(한라)山(済州島)を想起したためではないかと思っているが、なお憶測に過ぎない。

このように、災害そのものの姿が明らかになったことで、これらの遺跡は大変な価値を持つが、それ以上に重要なことは、これほどの惨事に遭いながらも、あづまびとは滅びるどころか、六世紀半ば以降に、それ以前を超えた輝きを示し続けたことである。綿貫観音山古墳などの六世紀後半以降の古墳とその文物、あるいは東歌は、その一端を示す例と言える。

あづまに根ざした貴族達の足跡

そこから私の関心は、東国六腹朝臣らの主たる勢力圏はどこかに移るが、墓誌等の文字資料が検出されない以上、未定と言わざるをえない。

その中で、状況証拠から考えれば、上毛野君(朝臣)の主たる本拠地としては、上野国府が開かれる前橋市西部・高崎市北部一带などが考えられ、前橋市の総社古墳群をその奥津城と見る意見は有力だが、その勢力圏は少なくとも群馬郡・勢多郡全域に及んでいた可能性が高い。下毛野君の本拠地は、下野国府が開かれる栃木市・下野市・壬生町、つまり都賀郡域一带と見るのが妥当だろう。佐味君については、今日の藤岡市とほぼ重なる旧・緑野郡と今日の玉村町周辺の旧・那波郡に佐味郷が確認されることから、群馬県南部に勢力圏を持つていたと見られる。その意味では、金冠塚古墳(前橋市)や未発掘の七興山古墳(藤岡市)などは大いに注目される。一方、車持君については、特異な氏名から古い氏族と見られ、群馬郡の由来と考えられるが、律令国家が完成してくる段階での主たる勢力圏を特定することは難しい。池田君も同様だが、枝族と見られる石上郡君が碓氷郡等に勢力を持ち群馬県西・北部に力を延ばしていったことは示唆深い。大野君は、

飛鳥時代から奈良時代の前半にかけて上毛野君・下毛野君と匹敵する力を有していた可能性が高いが、群馬県・栃木県地域で関連する地名等を検出することは難しく、埼玉県・埼玉古墳群なども検討の対象とする必要を感じているが、全て今後を期したい課題である。

第四節 あづまから日本へ―上野三碑の位相

完全な形で現存する日本最古の石碑群

東国六腹朝臣の政権中枢での活躍以上に注目しておきたいのが、七世紀半ば以降のあづまに根ざした人々の活躍の様子である。その一端を示すものこそ上野三碑と総称される山上碑・多胡碑・金井沢碑の存在である。

山上碑―日本語で書かれた最古の石碑

結論から言えば、「辛巳(碑の文字は「己」)歳集(焦?)月三日記」で書き始められる山上碑は、完全な形で現存する日本最古の石碑である。辛巳年を六八一年と見ることに異論はない。石碑として最古だから当然だが、内容を見ると、母のために記された最古の墓碑ないし追善供養碑となる。

そこで金石文全体に目を向け、その位置づけを考えてみると、日本語として書かれた最古級の金石文であることに気づかされる(表4)。固有の文字を持たない我が倭人は、文を書くには漢文に拠らざるをえなかった。漢字・漢文を文明の核とする中華文明の周辺文明として出発した我が列島社会は、漢字・漢文を公用文とする世界の中で自らの国家や文明を形成せざるをえなかった。固有名詞の表記には万葉仮名的な用い方があったとしても、原則、漢文でものを書いてきた。

それが七世紀の半ばあたりから、訓読の読みをベースに、漢文とは全く異なる我が倭人のことばの並べ方に漢字を並べ替えて表現しようとする試みが動き出す。六八〇年前後に、その試みが一挙に形となる

表4 文脈で見た金石文史

5世紀半ば			稲荷台1号墳出土鉄剣銘文	千葉県市川市	
471	辛亥年	漢文脈	埼玉稲荷山古墳出土鉄剣銘	埼玉県行田市	国宝
5世紀後半		漢文脈	江田船山古墳出土鉄刀銘	東京国立博物館	国宝
503	癸未年	漢文脈	隅田八幡神社人物画像鏡	和歌山県橋本市	国宝
6世紀半ば			岡田山1号墳出土鉄刀銘文	島根県松江市	
570	庚寅年	漢文脈	元岡古墳群G6号古墳出土鉄製大刀	福岡市西区	
628	戊子年	漢文脈	法隆寺金堂釈迦三尊光背銘	奈良県斑鳩町	重文
650推定		和文脈	法隆寺金堂木造広目天・多聞天造像銘	奈良県斑鳩町	国宝
651	辛亥年	和文脈	法隆寺献納宝物金銅観音菩薩像台座銘	東京国立博物館	重文
654	甲寅年	漢文脈	法隆寺献納宝物釈迦像台座銘	東京国立博物館	重文
658	戊午年	漢文脈	旧観心寺蔵阿弥陀如来像光背銘	東京・根津美術館	
666	丙寅年	和文脈	法隆寺献納宝物菩薩半跏像台座銘	東京国立博物館	重文
680前後		和文脈	宣命体木簡・万葉仮名表記の歌木簡出始める。 柿本人麻呂歌集の略体歌・非略体歌の推定年代。		
680前後以降			法隆寺命過幡	奈良県斑鳩町等	
681	辛巳年	和文脈	山上碑	群馬県高崎市	特別史跡
686?	降婁	漢文脈	長谷寺法華説相図	奈良県	国宝
690前後以降		和文脈 漢文脈 和文脈 漢文脈? 漢文脈?	追記・後刻の造像記・墓誌の登場 丁卯年(607) 銘法隆寺金堂薬師如来像光背銘 ? 癸未年(623) 銘法隆寺金堂釈迦如来像光背銘 丙寅年(666) 銘河内野中寺弥勒菩薩像台座銘 戊辰年(668) 銘船王後墓誌 丁丑年(677) 銘小野毛人墓誌	奈良県斑鳩町 奈良県斑鳩町 大阪府藤井寺市 東京・三井記念美術館 京都市左京区	国宝 国宝 重文 国宝 国宝
692	壬辰年	和文脈	出雲国罫淵寺観音菩薩像台座銘	島根県出雲市	重文
694	甲午年	和文脈	法隆寺銅板造像記	奈良県斑鳩町	重文
700	庚子年	混交	那須国造碑	栃木県大田原市	国宝
702	壬歳次攝提格	和文脈	豊前国長谷寺観音菩薩像台座銘	大分県中津市	県有形
707	慶雲四年	漢文脈	文祢麻呂墓誌	東京国立博物館	国宝
707	慶雲四年	漢文脈	四天王寺蔵威奈大村骨蔵器	大阪市天王寺区	国宝
708	和銅元年	混交	伊福吉部徳足比賣骨蔵器	東京国立博物館	重文
708	和銅元年		圀勝寺下道圀勝弟国依夫人骨蔵器	岡山県矢掛町	重文
711	和銅四年	和文脈	多胡碑	群馬県高崎市	特別史跡
712	和銅五年	漢文脈	『古事記』		
714	和銅七年		佐井寺僧道葉墓誌	奈良国立博物館	重文
717	養老元年		超明寺碑	滋賀県大津市	部分残存
720	養老四年	漢文脈	『日本書紀』		
722	壬戌年	和文脈	山代真作墓誌	奈良国立博物館	重文
723	養老七年	漢文脈	太安萬侶墓誌	奈良県立橿原考古学研究所	重文
723	養老七年	漢文脈	阿波国造碑	徳島県石井町	県有形
726	神亀三年	和文脈	金井沢碑	群馬県高崎市	特別史跡
729	神亀三年	漢文脈	小治田安萬侶墓誌	東京国立博物館	重文
730	天平二年	漢文脈	美努岡萬墓誌	東京国立博物館	重文
751	天平勝宝三年	漢詩集	『懷風藻』		
751	天平勝宝三年	漢文脈	竹野王多重塔	奈良県明日香村	
753	天平勝宝五年	漢文脈	薬師寺仏足石	奈良県奈良市	国宝
753?		万葉仮名	薬師寺仏足跡歌碑	奈良県奈良市	国宝
762	天平宝字六年	漢文脈	多賀城碑	宮城県多賀城市	重文
762	天平宝字六年	漢文脈	石川年足墓誌		国宝
776	宝亀七年	漢文脈	叡福寺蔵・高屋枚人墓誌	大阪府太子町	重文
778	宝亀九年	漢文脈・仏典抄	宇智川磨崖碑	奈良県五條市	史跡
784	延暦三年	漢文脈	妙見寺蔵・紀吉継墓誌	大阪府太子町	重文
790	延暦九年	漢文脈	浄水寺南大門碑	熊本県宇城市	県史跡

ことが本簡や『万葉集』の記載内容から判明しつつあるが、山上碑は、まさにその時代に符合する³⁰⁾。しかも、山上碑は、発掘資料でも写本でもない、地域で守り続けられた第一級の生史料である。完全な形で現存する日本最古の日本語碑である。

多胡碑―最古かつ唯一の建郡碑

多胡碑は最古かつ唯一の古代建郡碑である。漢文としても読めると言われるが、これまた、頭から日本文として読むことが出来る。記載内容は、『続日本紀』和銅四年(七一)三月辛亥条と一致しているが、『続日本紀』に記録として留められた符と呼ばれる政權中枢から下された行政命令書と内容は同じでも、書き方に違いがある。

図2のように、符が新しい郡を作る対象として甘良郡・緑野郡・片岡郡の六つの郷(厳密に言うところ、和銅四年段階では「里」)、『続日本紀』の記述を借用して「郷」で示した。)の名を列挙するのに対し、碑は六つの郷の全人口となる三百戸という表現を採り(戸というのは自然の家ではなく兵士一名を出せる単位でおおむね二十五人からなり、五十戸をもって一郷とするので、郷もまた自然村落ではない)、符が六郷を「割き」「郡を置け」と記すのに対し、碑は戸を「并せて」「郡と成す」としている。碑の視線は地域からの視線、地域内への視線である。それが日本語として読める形で記されている点に極めて大きな価値がある。

また多胡碑は韓国・中国でも高く評価され続けているが、二〇一四年は、発端となった宝暦度の朝鮮通信使への拓本提供から二五〇年目に当る³¹⁾。

金井沢碑―日本仏教の定着と展開の転換点

神亀三年(七二六)の銘を持つ金井沢碑は「上野國羣馬郡下賛郷・高田里」で始まるように、「羣(群)馬」の字が確認される最古の碑で、律令国家がある期間だけ(七一五〜七四〇)採用した「郡・郷・里」

太政官符ニ上野國司ニ

置クニ多胡郡ヲ一事

右奉^ラバ^レ勅ヲ、割^キニ甘良郡^{おりも}織裳^{からしな}、韓級^{やた}、矢田^{おおやけ}、大家、

緑野郡^{むみ}武美^{やまな}、片岡郡山等六郷^一、別置^ケニ多胡郡ヲ^一

符到^ラバ奉行セヨ

左中弁正五位下多治比真人三宅麻呂 史位姓名

和銅四年三月甲寅(または辛亥) 使人位姓名

鈴剋

弁官符上野國片岡郡緑野郡甘

良郡并^ニ三郡内三百戸郡成^ニ給羊

成多胡郡和銅四年三月九日甲寅

宣左中弁正五位下多治比真人

太政官二品穗積親王左大臣正二

位石上尊右大臣正二位藤原尊

図2 推定復元した太政官符と多胡碑

の表記を持つ。

「知識」と記す講を作って祖先を追善供養する内容が記され、「知識」を結んだ主体が山上碑建立者に連なる点などが注目されているが、「知識」なる講は単に信仰の寄合に留まらず、講を通して地域の課題を解決し合う実践的な集団であった可能性が高い。そのことは、やがて、あづまから、「鑑真和上持戒第一の弟子」と『叡山大師伝』に記された道忠（上野国緑野寺・武蔵国慈光寺開基）の指導のもと、円澄（武蔵国人、七七二〜八三七、第二代天台座主）・円仁（下野国人、七九四〜八六四、第三代天台座主）・安恵（下野国人、八〇五〜八六八、第四代天台座主）をはじめとする大乘菩薩僧、日本仏教の祖師たちが陸続と生まれていったことから推測される。金井沢碑はその起点としても貴重な存在である。

最後は駆け足になってしまったが、いま群馬県では、富岡製糸場と絹産業遺産群の世界文化遺産登録に続いて、上野三碑を世界記憶遺産にしようという動きが具体化しつつある。その中で、あづまのくにの全体像を日本史、世界史の中で位置づけ直すことの重要性は高まりを見せつつある。未解決の課題に少しでも近づくことを改めて決意して擲筆としたい。

なお、東歌の位置づけや解釈等において北川和秀先生から恒常的に多くの御教示と御示唆をいただいた。感謝申し上げます。

注

- (1) 拙稿「あづまのくに」群馬考古学研究会『東国の考古学』二〇一三年 六一書房
- (2) 拙稿『古代東国の王者』二五〜二七頁 二〇〇八年 雄山閣
- (3) 拙稿「上毛野氏と東国六腹の朝臣」『古代を考える 東国と大和王朝』一九九四年 吉川弘文館。この時点では、万葉仮名の「努」がノ甲類であることを理解せず、上毛野を「かみつけぬ」と読んでい

た。

- (4) 北川和秀「上野東歌探訪」『上州文化』一二二〜一三七 二〇一〇〜二〇一四年 財団法人群馬県教育文化事業団 ほか
- (5) 魏の年号が記された鏡は他に五面あるが、いずれも三角縁神獸鏡ではなく、また全て西日本の所在である。他方、同年代の呉の年号を記した鏡も二面あり、一面は山梨県市川三郷町の鳥居原狐塚古墳出土である。
- (6) この事実、偽書でありながら高い評価も見受けられる『先代旧事本紀』国造本紀の下毛野国造条に見える「難波高津朝御世（仁徳朝）、元毛野国為上下」の記載に疑問を投げかける。
- (7) 『日本書紀』崇神天皇十六年九月甲辰条。『古事記』は崇神天皇段で所知初国之御真木天皇と記している。
- (8) 『日本書紀』崇神天皇冊八年四月戊申朔条
- (9) 『日本書紀』景行天皇五十五年二月壬辰条
- (10) 『日本書紀』景行天皇五十六年八月条
- (11) 『日本書紀』神功皇后冊九・五十年条。応神天皇十五・十六年条。仁徳天皇五十三年条。
- (12) 『日本書紀弘仁私記』諸蕃雜姓記注。『新撰姓氏録』左京皇別下上毛野朝臣条・住吉朝臣条・桑原公条・商長首条・川合公条等。拙稿『古代東国の王者』一七七〜二〇三頁 二〇〇八年 雄山閣
- (13) 左京皇別下下毛野朝臣・上毛野朝臣・池田朝臣・住吉朝臣・池原朝臣・上毛野坂本朝臣・車持公・大網公・桑原公・川合公・垂水史・商長首・吉弥侯部、右京皇別上上毛野朝臣・佐味朝臣・大野朝臣・垂水公・田辺史・佐自努公、大和国皇別に下養公・広来津公、摂津国皇別に韓矢田部造・車持公、河内国皇別に広来津公・止美連・村拳首、和泉国皇別に佐代公・珍泉主・登美首・葛原部・茨木造・丹比部・輕部、右京諸蕃上に田辺史、未定雜姓摂津国に我孫、未定雜姓河内国に佐自努公・伊氣、未定雜姓和泉国に我孫公が搭載されている。
- (14) 『日本書紀』天智天皇二年三月条・六月条。ただし生死不明。
- (15) 『日本書紀』天武天皇十年三月丙戌条。ただし同年八月丁丑卒。
- (16) 『日本書紀』持統天皇三年六月癸未条

- (17) 『続日本紀』文武天皇四年六月甲午条、大宝元年四月庚戌条、同年八月癸卯条
- (18) 『公卿補任』大宝二年参議条「從四位下下毛野朝臣古麿 同日（五月十七日）任。三月詔古麿等。預定律令。宜議功賞。於是賜田十町封五十戸。三月、定廿町」とある。
- (19) 『続日本紀』和銅二年十二月壬寅条
- (20) 『続日本紀』和銅元年三月丙午条、和銅二年四月壬寅条、同年七月乙卯朔条、養老四年九月丁丑条、神龜二年閏正月丁未条、天平十一年四月壬午条等。
- (21) 『公卿補任』文武天皇四年、中納言從三位藤原朝臣不比等条
- (22) 拙稿「銅製容器古墳埋納と石碑盛行の意義―東国における『貴族』社会の形成と渡来文化」『考古学ジャーナル三四九号』一九九二年ニュー・サイエンス社。自らの不明にして、この段階では宮地嶽古墳出土品をカウントできていない。
- (23) ただし、観音山古墳出土鏡は、武寧王陵出土鏡ないしその同範鏡を元に新たな鑄型を作って鑄込んだ踏み返し鏡と見られている。
- (24) 一般に、この形式の銅瓶を王子形水瓶と称すが、伝世品の多い法隆寺ゆかりの聖徳太子が王子であったことからの変化であろう。
- (25) 矢部良明「北朝陶磁の研究」『東京国立博物館紀要』第16号 一九八一年、同「古墳時代後期の器皿にみる中国六朝器皿の影響」『MUSEUM』第42号 一九八五年
- (26) 拙稿「王子形水瓶、東国古墳出土の意義と背景―北朝・朝鮮・東国関係史への一視角―」上田正昭編『古代の日本と東アジア』一九九一年 小学館
- (27) 北川和秀「上野東歌探訪」『上州文化』二二三 二〇一〇年
- (28) 『万葉集』の歌番号で言えば、三四〇九、三四一〇、三四一四、三四一五、三四一九、三四二一、三四二二、三四二三である。
- (29) その場合、埼玉稻荷山古墳出土の鉄剣銘文が、阿倍臣（朝臣）関係氏族群に連なる系譜を示していることとの関係をどう見るかという問題が発生する。あづまの成り立ちに関わる根本的命題の一つである。
- (30) 詳細は、拙稿『日本語誕生の時代 上野三碑からのアプローチ』
- 二〇一四年・雄山閣をご覧いただきたい。
- (31) 多胡碑記念館図録『海を渡った多胡碑―多胡碑の朝鮮・中国への流传』二〇〇六年
- (32) 拙稿「東国仏教と日本天台宗の成立―最澄東国巡錫の意義と背景を導きとして」『高崎経済大学論集』四七―四 二〇〇五年